

共に考え 共に創る 魅力あるまち

広報せいよ

2016年 12月号
No.152

Seiyo City
Public Relations

伊予生糸、つなぐ。

〈特集〉「別輪」の今、そして、これから

「元気な限り続けるよ。目標は、生産量を減らさんことかな」
世界最高品質といわれる絹「伊予生糸」は、ここから生み出されています。

伊予生糸、つなぐ。

西予市産の繭から繰られる「伊予生糸」。世界最高品質と名高い絹です。しかし現在、生産者は激減。西予市の誇りが、失われようとしています。今号はそんな伊予生糸を使い、守り、未来につなげようと奮闘する人たちに迫ります。

力 タカタカタ…。糸車が軽やかに回る室内。同時に「ガシャン、ガシャン」と機を織る力強い音が響きます。

京都市にある「株式会社龍村美術織物」。美術織物というジャンルを確立した、西陣織を代表するメーカーです。ここ烏丸工場では主に帯を制作しています。「繊細で、光沢がある仕上がりは伊予生糸ならではの。他のどこにもない珍しい糸です」

社長の龍村旻さんは、伊予生糸の「白さ」と「柔らかさ」に魅了されている一人です。

「食後も苦しくない」秘密

「着物や帯のことをよく知っている人からは『最近の絹は針金のように』と耳にします。機械で織ると、糸に張力がかかるので、固い織物になってしまいうんですね。伊予生糸は張力をかけずに繰られているから、これを使って西陣の職人が織った帯は柔らかい。締めやすく、食事の後でもお腹が苦しくならないと評判です」

伊予生糸とは、西予市で育った繭を、独特の方法で繰った生糸のこと。現在、野村シルク博



繊細で美しい西陣の帯。伊予生糸の多くが、西陣織に姿を変えています。



「風合いが違います」。(株)龍村美術織物社長の龍村旻さん。

で初めてです。

癖は強いけれど、美しい

「復原装束を織るときは、伊予生糸が欠かせません」

同じく京都市の「渡文株式会社」。織工の渡邊尚美さんは、観世流片山家の能装束や京都祇園祭の装束復原を行っています。

「織りやすい生糸なら、他にもあります。これは癖も強く、決して織りやすいとは言えません。でも仕上りの美しさ、光

沢や風合いは格別です」

安価な外国産に押されて、国産生糸が占める割合は絹製品全体のわずか0・6%。流通量は年々減り続け、希少性が高まっています。

「伊予生糸は、普通の何倍も手間をかけて、丁寧に繰られています。だからこそ生まれるのが、白ツバキのような光沢と、柔らかな風合い。これが魅力です」日本の伝統産業を代表する西陣織。伊予生糸は、その美しさを根幹から支えています。

勢いよく噴き出している水蒸気は、細い糸に温度を与えて切れにくくするためのもの。機械でできない柄を再現できるのは、職人技あってこそ。(左)

渡文(株)で織工を務める渡邊尚美さん。「京都祇園祭でも、伊予生糸が使われているんですよ。『磯良』の装束も、美しいでしょう」(右)



京都祇園祭大船鉾のご神体人形の装束。伊予生糸で復原されました。海の神「磯良」の衣装とあって、波が表現されています。



かつて3つの製糸工場を抱え、養蚕で栄えた愛媛県。しかし、時代と共に洋服文化が定着し、国産繭に代わって安価な外国産が主流になりました。事業の不振は続き、平成6年に県内全ての製糸工場が閉鎖。繭から糸を繰る約100人の「繰糸工^{そうしこう}」たちは、全員解雇されました。

衰退は国内全土に広がり、現在操業している製糸工場は全国で4つに。その中の一つが、「野村シルク博物館」です。県内はもちろん、西日本で生糸を生産しているのは西予市のみです。

「何もない田舎に、なぜ？」

繭を煮た独特の匂いが漂う、野村シルク博物館の一室。井関奈央さん（野村町）はここで、繰糸工として働いています。

「小学生たちが見学に来ると、鼻をつまんで大騒ぎ。『くさくさいの？』と質問されますが、慣れたのか全く気になりません」

現在6年目。たった一人で伊予生糸を繰ってきました。

「物心がついたときから、このまちには染織^{せんしよく}講座がありました。技術を学ぶために都会から訪れる大人を見るたび『どうして何もない田舎に来るんやろう。都会の方が楽しいことがあるそうなのに』って。同時に、何がそこまで魅力的なんやろうと気になっていました」

小売業に就職しましたが、疑問の答えを見つけたくなり、野村シルク博物館へ。講座で技術を学び、前任者の定年退職後に繰糸工となりました。

思いがあるから踏ん張れる

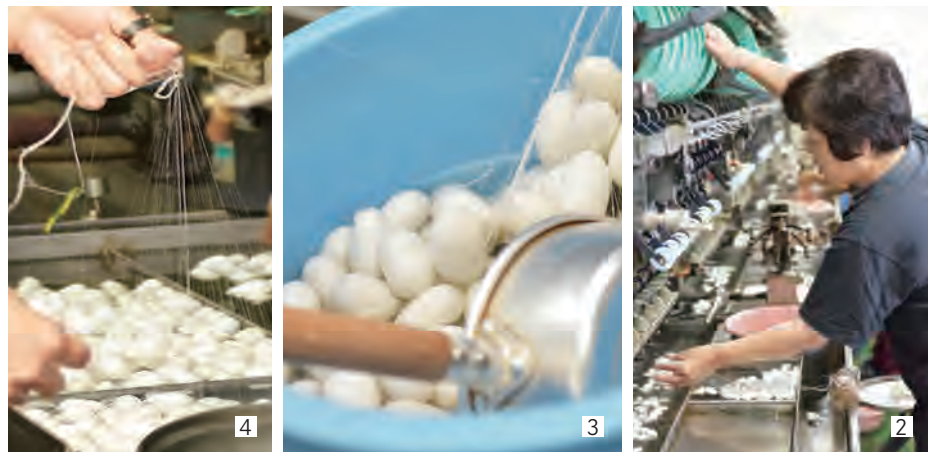
伊予生糸の特徴である「白さ」と「柔らかさ」は、工程に秘密があります。

「繭からガが出たら商品にならないので、一般的には熱風で中のさなぎを殺して保存します。でも、ダメージを受けた繭は品質が落ちる。だから生のまま冷蔵保存しています。全国でも西予市だけの工程です」

手間とコストはかかるけれど、熱ダメージを受けていない



1



2

3

4



1 出荷用に生糸を整える井関奈央さん（33）。2 約40年のキャリアを持つ峯山鈴美さん（70）は、かつて野村町にあった製糸工場（平成6年に閉鎖）に勤務。今年から井関さんの技術指導にあたる。「今のうちに伝えたいけん、奈央ちゃん以外にも若い子が来てくれたらいいけどなあ」3 糸を取りやすくするため、たんぱく質を壊さないように低温でじっくり煮た繭。「繭が柔らかいと糸がまっすぐにならず、硬いとずっと糸が引けない。『ちょうどいい』だけが正解」4 1本ずつ機械にかける。5 乾燥したら出来上がり間近。6 貯蔵庫の温度は6℃。7 同時に16本の糸を引く機械で、引っ張る力を抑えてゆっくりと繰る。8 「農家さんから私、私から職人さん。作業のつながりを思うと、いとおしい気持ちになります」



5

6



6



7



8

たった一人の繰糸工が繰る

クモ糸のような細さの糸を繰り、生糸に仕立てる、伊予生糸唯一の繰糸工。「別格」を繰る女性が、このまちにいます。



第19回染織講座受講生
川谷沙香さん
（京都府出身）

全国唯一が学べる「シルク博物館」

市内農家が生産した繭からの糸づくり、染色、手機織りなどを1～2年かけて毎日学ぶ染織講座を、野村シルク博物館で開催しています。絹織物の、全工程が学べる場所は全国でここだけです。

問 野村シルク博物館 ☎0894（72）3710

INTERVIEW

「講座を知り2年前に移住しました。糸になる前の素材から学べたのは、思っていた以上の収穫。本物を知ることでの質の良さが分かるようになりました。」

西予市が持っている物の価値は、外の人が実感しているのかも。受講生のほとんどが、市外出身者ですから」

生繭を使う。伊予生糸が白く輝く理由です。

糸を繰る機械も、ゆっくりと動かします。これが「柔らかく」なる秘密。引っ張る力を抑えて繰るので時間がかかり、量は多く作ることができませんが、品質を守るための大切な作業です。

「繭は全て、市内の農家さんが一生懸命に育てた上質なもので。最後まで糸を取って、美しい生糸にするのが私の役目です」

繰る量は、1年で約130kg。かつて製糸産業が最盛期だった頃の、半日分にしか過ぎません。「辞めたいと思ったことは一度もありません。生まれ育ったまちの伝統が続いてほしいという願いがあるからかな。今、私が踏ん張っていたら、次の世代につながる可能性があるんじゃないかって思っんです」

思いがあるから踏ん張れる。夢は、相談し合える同年代の繰糸工仲間ができることです。



就農を目指す松山市在住の女性（39）。自身が手掛けた伊予生糸で、肌着を作るのが夢です。「問題は住まいと桑園。畑を借り、桑を植えても収穫できるのは3年後。桑がないと蚕は育てられません。その期間どうするか、今から計画を立てて行動したいと思います」



初出荷で260kg。「繭にする『上簇』という作業は技術が必要で、まだまだ難しい。でも何とか形になってよかった」と阿部さん。



「2年間は養蚕技術を学び、3年後の就農を目指します」松山紀彦さん（55） 「来年の目標は、繭出荷量400kgです」阿部盛彦さん（43）

今しかない だから挑戦する

6戸にまで減少した市内の養蚕農家。ようさん

今年、約50年ぶりに新規農家が誕生しました。

「この機会を逃したらいけない」

彼らを動かすのは、将来への希望と使命感です。

霧の発生が多く、傾斜地に広がる畑が桑の栽培に最適な西予市。伊予生糸の原料となる繭を生産する養蚕農家は、全盛期の昭和4年頃、1883戸ありました。

しかし生糸価格暴落による製糸工場の閉鎖と合わせて、生産者は激減。昨年、ついに6戸となりました。平均年齢は約80歳。繭の出荷量は全盛期の1割程度に落ち込み、後継者がいるのは2戸のみです。

使命感と将来性で「就農」

「やりがいがあります。消えそうなものをつなぐという使命感があるからでしょうか」

東京都出身の阿部盛彦さん（宇和町）。13年前に移住し、かんきつ栽培を続けてきましたが、今年から養蚕農家に転身しました。

「きつと今が最後のチャンス。この機会を失うと、養蚕はなくなってしまう」

世界的に評価されている伊予生糸と、それを育む養蚕に、将来性を感じています。就農に必要な桑や倉庫は、県や市から支援を受けました。

「蚕は生き物ですから、殺虫剤を使えない。夏の暑い時期は、いろんな虫に刺されました。決して心地良いものではないですが、繭になったときのうれしさといったら。育てるおもしろさを感じています」

新規就農者の誕生は、およそ50年ぶり。市内の養蚕農家は7戸になりました。

「課題もあります。蚕の飼育時期は5月から10月。この期間しか、養蚕での収入はありません」伝統をつなぐ一員になることと、生活すること。2つを同時に叶えることが、阿部さんの目標です。

広がる連鎖、市外からも

阿部さんに続けと、就業体験を始めたのが松山紀彦さん（宇和町）です。

「継承していく価値があるものの。衰退産業だといわれているが、伊予生糸には可能性が

養蚕に興味があれば相談を

養蚕に興味がある人は、まずご相談ください。必要な施設や環境整備に、手厚い支援があります。

問 農業水産課
☎0894（62）6409

繭が増えれば、生徒募集を再開できます

「糸を紡ぐ・染める・織る」3工程が学べる染色教室を毎月1回、野村シルク博物館で開催しています。しかし市産繭の不足により、新規生徒の受け入れができない状態です。今後、量が増えれば受け入れを再開できる可能性があります。

INTERVIEW

「この帽子とベストは、西予市産の繭から紡いだ糸を教室で染めて、織って、生地にしたものからできています。私だけのオリジナル作品。お気に入りです。まだ生徒を募集していた4年前に入会しました。楽しんでいます」



教室に通っている性田明美さん（大洲市）

る。行政の支援が手厚いこと、保存の機運が高まっていることにも背中を押されました」

養蚕の未来に希望を感じている松山さん。農業は未経験ですが、3年後の独立を目指し、桑園の確保を進めています。今後、市内のベテラン農家から技術を学びます。目標は「伊予生糸の生産と発展に貢献すること」。古里のために尽力したいと意気込みます。

連鎖はこれだけに留まりません。長年の肌荒れがシルクの肌着で治まったことで、天然素材に魅せられた松山市の女性は、現状を知り「後継者として伊予生糸に携わりたい」と一念発起。定期的に西予市に通い、養蚕を学んでいます。

移住の目標は来春。現在空き家を探している最中です。

源流の奮闘 つなげ、西予の誇り

受け継ぐことを決意した若者たちと
年齢と闘いながら、真摯に伝統をつなこうとする人。
互いの思いが交差し、今、この町の「誇り」は
再び光を浴び、勢いを取り戻そうとしています。



1 成長した桑は背丈の2倍以上。空に月が残る早朝6時前から摘み取り作業を開始。2時間後、表紙のように景色が開けます。2 この量で蚕の食事2食分。荷台いっぱいの桑摘みを1日2回行います。3 「繭になる前の蚕は体が透けるんですよ。ほら、分かる？」4 選別した蚕を「回転族」という枠へ。枠以外の場所で繭になると商品にはなりません。蚕は成長を止めてくれないため、作業は時間との勝負。5 「シャシャシャ…。雨が降っているかのような音が響く蚕室。これは蚕が桑の葉を食べる音。その数、多いときで15万頭以上。給餌は1日3回、毎朝4時から。6 手伝いに来た近所の人たちと休憩。出荷用コンテナが机代わり。7 繭になりそうな気配を察知すると、妻の厚子さんは夜中でも選別作業を始めます。8 「回転族」は蚕が片方に固まると枠が回転。均一になるよう誘導します。9 大きくきれいな繭になるための秘訣は「桑をたっぷり食べさせること」。10 「別格」を育む風景。



黙

々と作業を続けながら、松下誠さん（野村町）は「いいことやなあ」と、新規就農者を歓迎します。

昼夜を問わず行っているのは、繭になろうとする蚕を選別し、枠に移す「上簇」という作業。美しい生糸にするための重要な工程で、技術も求められます。

蚕の成長に合わせた作業は、時間との戦い。夫婦だけでは間に合わないため、近所からは助っ人が集まります。

「手伝いに来てくれる人らも高齢やけん、いつまでできるか。先のことは分からん」

50年前に、父から養蚕を受け継いだ松下さん。周囲が廃業する中、土木業と掛け持ちしながら続けてきました。「親が営んできたことを守らなければ」という使命感があつたからです。

松下さんたち市内7戸の養蚕農家が育む繭からできる、伊予生糸。その価値を広めようと、

市は、東京オリンピックピックのメダル帯に採用されるよう動いています。今後は試作品を制作、発信していく予定です。

続ける。体が動く限り。

74歳の松下さん。桑を運んだり天井から回転族を吊る作業は体力勝負。時に息が上がります。「しんどいよ。でも、体が動く限りはな。続けることが大事」

世界最高品質の絹と言われることに喜びを感じるけれど、「何も特別なことではない」とぼつり。思いは常に、目の前の桑や蚕、繭に向けられています。

養蚕は日常の一部。年を重ね、作業に時間が必要となってきたも、続けることが「当たり前」。源流にあるのは、まちの営みを継承し、日常をいとおしむ気持ちです。

勢いを取り戻そうと奮闘を続ける、西予市の宝。その価値を知り、伝え、かわることが、守ることにつながります。伊予生糸を未来につなぐのは、このまちで暮らす、私たち自身です。

約10kgの束を担ぎ、運ぶ松下誠さん（74）。蚕の餌となる桑は、毎日収穫します。